364　唾液腺腫瘤のFDG PET—Tc, Gaシンチとの比較

岡村光英, 小山孝一, 小橋肇子, 下西祥裕, 岸本健治, 山田龍作(大市大放), 河辺譲治、越智宏暢(同核), 阪本浩一(同耳)

唾液腺腫瘤に対しFDG PETを施行し、Tc, Gaシンチと比較検討した。対象は唾液腺癌5例、ワルチン腫瘍6例、多形腺腫12例、炎症性腫瘤5例の計28例である。方法は^{18}F FDG静注後40-55分後に撮像し、病変部のSUVを求めた。　SUVの平均は癌5.92、ワルチン7.03、多形腺腫4.07、炎症1.66であり、癌とワルチンで高集積、多形腺腫は両者より低い傾向ながら、癌と有意差はなかった。^{99m}Tc-O4-はワルチンで唯一高集積を示し、その鑑別に有用であった。^{67}Ga-citrateは癌では4例で高集積、ワルチンでは全例正常、多形腺腫と炎症では正常～中等度の集積で、後二者は鑑別し得なかった。　FDG PETにて唾液腺腫瘍と炎症性腫瘤との鑑別は可能であったが、良悪性の鑑別は困難で、Tc, Gaシンチと比較が有用であった。

365　Warthin 腫瘍におけるレモン負荷 ^{99m}Tc 耳下腺シンチグラフィの検討

松本　陽、三宅秀敏、岡原美香、詫摩真久、堀　悠子、堀　雄三、松本俊郎、高木　一、森　宣（分医大放）

^{99m}Tc耳下腺シンチは主にWarthin 腫瘍で集積し、正常耳下腺と集積の程度に差が無い場合でも唾液分泌（レモン負荷）を行うことで正常耳下腺がwash outされ腫瘍への集積が鮮明になると言われている。我々の施設でも1988年7月以降耳下腺腫瘍が疑われた症例にはすべてレモン負荷耳下腺シンチを施行している。

今回我々はWarthin 腫瘍での集積の有無、程度、腫瘍の大きさ、内部の性状の違いについて検討し、さらに病理組織と対比することでWarthin 腫瘍に対する耳下腺シンチの有用性についてを考察した。また他の耳下腺腫瘍との鑑別にレモン負荷耳下腺シンチが有用か否かについても検討を加えた。

366　ワルチン腫瘍における酸味負荷併用^{99m}TcO_4^-シンチグラフィーの試み

池田耕士，河　相吉，田中敬正（関西医大放）

ワルチン腫瘍は^{99m}TcO_4^-シンチグラフィーにて高集積を示すことが知られているが，warm　lesionとして描出が不明瞭な場合も多い。我々はワルチン腫瘍3例に対して酸味負荷を併用した^{99m}TcO_4^-シンチグラフィーを行い，その有用性を検討した。負荷前像を撮像後に酸味負荷としてシナール錠（アスコルビン酸）を口腔内に服用させた。2例は負荷前像で腫瘍は高集積としてみられ，負荷後像にて更に明瞭となった。1例は負荷前像は他の耳下腺部位と同程度の集積であったが，負荷後像では高集積が明瞭にみられた。唾液の分泌刺激を行い健常部からは排泄が良好なのに対して，ワルチン腫瘍は導管系との交通がないため腫瘍部に滞留し良好なコントラストが得られ，診断に有用であった。

367　放射線治療を施行した上咽頭腫瘍に対するClinical FDG-PETの有用性

三橋紀夫，早川和重，高橋健夫，古田雅也，新部英男（群大放）冨吉勝美（群大核）松原国夫（群大中放）

放射線治療を施行した上咽頭腫瘍患者に対するFDG-PETの有用性について検討した．　対象は低分化型扁平上皮癌１０例，非ホジキンリンパ腫２例，腺癌１例，腺様嚢胞癌１例，免疫細胞腫１例で，のべ２６回の検査を治療前後で行った．　定性的画像評価をフィルム上で行うと，Sensitivity, Specificityならびに Accuracyはそれぞれ92.9%, 83.3%, 88.5%であった．またMetabolic Ratio:MR値（小脳皮質と腫瘍集積の比)を用いて半定量的解析を試みたところ，放射線治療効果とMR値の推移とは良く相関した．低分化型扁平上皮癌ならびに非ホジキンリンパ腫では他の組織型に比してMR値が高く，ブドウ糖代謝が盛んであることが示唆された．

368　頭頚部癌の^{11}C-methionine PETによる重粒子線治療効果判定法の検討

吉川京燦，古賀雅久，今井康則，松野典代，須原哲也，須藤康彦，　吉田勝哉，　鈴木和年（放医研）

頭頚部癌において重粒子線治療の前後に施行した^{11}C-methionine PETの結果を評価し、臨床上の治療経過と比較検討した。対象症例は治療開始から8.3ヶ月～19.1ヶ月の経過観察を行った7例と、6.1ヶ月～9.2ヶ月の経過観察を行った8例の2群に関して検討した。PET検査は治療開始前と終了後早期の2回施行し、methionineの集積評価には腫瘍と頚部正常筋肉との比（TMR）を用いて評価した。

治療前にmethionine集積が高く治療によってもあまり減少しない症例は予後不良であった。また、減少してもある基準値付近より低下しない症例も予後不良の傾向であった。低い値に減少した症例は現在のところ良くコントロールされており再発の傾向は認められていない。

369　^{99m}Tc-MIBIシンチグラフィによる頭頚部腫瘍における放射線治療効果判定の有用性の検討

竹田芳弘、安藤由智、佐藤修平、小林　満、赤木史郎、新屋晴孝、平木祥夫（岡大放）中川富夫（国立福山放）

放射線治療前後に^{99m}Tc-MIBIシンチグラフィを行い、治療効果と集積性について評価した。　対象は11例で、^{99m}Tc-MIBI静注後5～15分後に早期像を、3時間後に後期像を撮像した。放射線治療の一次効果と対比して、視覚的評価ならびにT/N比による定量的評価を行った。

視覚的評価では、治療前後における集積はPR症例で低下あるいは消失し、NC症例では不変であった。定量的評価では、治療前後における集積比の変化はPR症例では早期像で治療後低下し有意差がみられたが、NC症例ではほとんど変化はみられなかった。　^{99m}Tc-MIBIは放射線治療効果を反映した集積変化を示しており、放射線治療においても腫瘍活性を評価しうるものと思われた。

Presented by Medical*Online